

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1988年

# ポーランド月報

11月号  
(通巻80号)  
400円

改革か 革命か 停滞か ——ポーランド社会学会での討論から

● ポーランドのための危機克服協定とは? B・ゲメレク



ポーランド日誌 1988年8月14日～9月3日……………2  
 当局との対話再開に向けて……………3  
     「連帯」全国執行委員会のコミュニケと声明  
 チェコスロヴァキア侵攻20周年にあたって……………4  
     東欧共同声明——1988年8月21日

ポーランドのための危機克服協定とは？……………5  
     プロニスワフ・ゲレメクとのインタビュー  
 改革は本当に可能か——ゲレメク教授に反論する……………8  
     『週刊マゾフシエ』匿名読者の手紙

改革か 革命か 停滞か……………10  
     ポーランド社会学会での討論から

「連帯」「ワレサ」「レーニン造船所」……………14  
     はじめてのポーランド 満島 裕直

「連帯」が期待するもの 政府当局が期待するもの……………18  
     「連帯」在外調整局

ポーランド日誌

1988年8月24日～9月3日

8月24日 「連帯」顧問の社会学者シチシェレツキ教授が暴行を受けて7月11日に死亡した事件で、ワルシャワ警察は容疑者3人を逮捕。ワルシャワ・ラジオによれば、いくつかの証拠からこの犯行は純粋な強盗事件であり、政治的背景はないという。

8月25日 自主的平和運動「自由と平和」の組織した国際人権会議がクラクフで開幕。参加者1000名のうち外国からの参加者が200人以上おり、その中には欧州議会をはじめ西側の組合、人権団体やハンガリー、チェコの自主的運動体などからの代表も。同会議は28日に閉幕。

8月28日 党中央委総会が閉幕。締めくくりの演説でヤルゼルスキ第一書記は「われわれは国民のほんの一部にすぎない。(……)いくたびか歴史的な重大決定

が下されてきたが、われわれ共産党員は、この決定が時の試練に勝てなかったことも知っている」と、異例とも言える内容の発言。

8月30日 ソ連がカティンの森で殺害されたポーランド将校の慰霊碑を建てる予定と伝えられる。

8月31日 全国各地のストにより、政府とワレサの会談がワルシャワでついに実現。グダンスクに戻ったワレサはスト中止を要請、「円卓会議」で「連帯」再合法化が議題のひとつになると語る。

9月1日 グダンスクの工場連合ストライキ委員会、スト終了を決定。マニフェスト・リブツォヴィ炭鉱のスト労働者は、ワレサが直接スト中止理由の説明に来るまでストを続けると語る。シチェチンでもスト続行。

9月2日 シチェチン港湾労働者、スト中止。ワレサ、シロンスクへ行きマニフェスト・リブツォヴィ炭鉱でスト中止を説得。一部の労働者はなお抵抗を見せたという。

9月3日 マニフェスト・リブツォヴィ炭鉱、スト中止。シチェチンのバス車庫でもスト終了。

## 当局との対話再開にむけて

「連帯」全国執行委員会のコミュニケと声明 1988年9月10日

Solidarity's National Executive Committee Communique and Statement, 10 Sept. 1988  
Uncensored Poland News Bulletin No.16-17/88, 10 Set. 1988

### コミュニケ

「連帯」全国執行委員会は、ヤシチシェンピエ、グダンスク、シチェン各市の工場連合ストライキ委員会（MK S）、銅鉱地帯の鉱山労働者委員会、スタロヴァヴォラ製鉄所、ノヴァフタのレーニン製鉄所、ピアウィストク地区からの各代表をまじえた拡大会議を1988年9月10日に開いた。会議では「円卓会議」問題が議論され、これに関する声明が作成された。ヤシチシェンピエMK Sの代表たちは、先日のスト終了後、石炭委員会（＝当局）が炭鉱労働者側と、鉱山に関する諸要求をめぐる会談に入ることができなかった点をあげ、政府当局の意図は信頼できるのかとの疑問を提示した。個人農との連絡を担当する全国執行委メンバーからは、「円卓会議」で個人農組合「連帯」の法的登録はどう扱われるか、との問題が提出された。今回の会議にはまた独立学生連盟（N Z S）代表も出席しており、第3回N Z S全国大会での討論内容を概説するとともに、これまでの「連帯」の行動が同大会で支持されたことを表明した。会議参加者はN Z Sとの協力を今後とも継続し、新たに選出されたN Z S調整委員会からの代表者を今後の討論に招くことを決めた。

### 声明

「連帯」全国執行委員会は、各地の工場連合ストライキ委員会との合同会議において、最近の情勢の進展の結果として起こりうるポーランドの政治

的变化の展望について検討を加えた。今回の一連の出来事で、われわれの組合の強さが示された。その強さを裏付けするのが5月と8月のストであり、「連帯」再建委員会や組織委員会の各地での誕生であり、「連帯」の理念が若い世代に受け継がれているという事実である。「連帯」の強さはまた、抗議行動を手控えることができる点にも表われている。われわれは、対話に入るという決定を下した。そして「連帯」は、自らのアイデンティティを保持できるならば合意する用意がある。われわれは当局が「連帯」の合法活動を認めてもよい」と明言することを期待している。「連帯」の法的登録がないかぎり、「連帯」はポーランドの改革プロセスに効果的に参加することはできないのだ。「連帯」全国執行委員会と各地の工場連合ストライキ委員会は、当局との対話においてレフ・ワレサに支持を与えるものである。同時にわれわれは当局に対し、ストライキ参加者への報復処置——拘禁、解雇、刑罰としての徴兵など——は当局側の提案の信用を失わせるだけであると強調したい。こうした報復行為およびマスメディアでの悪意に満ちたプロパガンダにすみやかに終止符が打たれることを望む。わが国で最も重要な諸問題を解決するための話し合いが支障なく行えるような環境を作ることは、すべての者の責任なのである。

（訳：高橋 初子）



## チェコスロヴァキア侵攻20周年にあたって：東欧共同声明—1988年8月21日

Joint East European Statement on 20th Anniversary of the Warsaw Pact  
Invasion of Czechoslovakia, 21 Aug. 1988  
Uncensored Poland News Bulletin, Nos. 16-17/88, 10 Sept. 1988

【原注】この声明文の草稿に関する討論の組織化と署名の収集は、ハンガリーの独立諸グループの要請にもとづいてロンドンの東ヨーロッパ文化基金の協力で行われた。ポーランド以外の他の東ヨーロッパ諸国からの署名はここではごく一部しか公表されていない。

1968年のチェコスロヴァキアの改革運動は、ソ連から輸入した体制の民主化をめざすものとして1956年のハンガリーとポーランドの運動に続くわれわれの地域における新たな試みであった。プラハの春は、民主化がわれわれ諸国民の政治的願望となり続けるであろうことを証明した。それは、さまざまな勢力の協調が平和的、文明的な変革をもたらし得ることを示した。したがって、それは今日なお民主主義を望むわれわれの社会を鼓舞し、それに希望を与える源泉となっている。

ワルシャワ条約軍の侵攻は20年におたる抑圧と停滞を強制した。これはチェコスロヴァキアだけにとどまらず地域全体における反動勢力の勝利を画するものとなり、東・中欧の今日の危機をもたらした。

この事態は、ワルシャワ条約加盟国における個々の(別々の)経済的、政治的改革だけに自己を限定すべきではないとの警告をわれわれに与えた。ワルシャワ条約自身を変革すべきなのである。

—われわれすべての国民はソ連国家がその約束を守り、被占領諸国からその軍隊を撤退させることを心から望むものである。

—今後、条約自身も加盟国間のいかなる相互協定も、国内の政治対立に対する内外からの軍事干渉を決して合法的なものとして認めないことを曖昧さのない形で声明すべきである。

—ヨーロッパにおけるブロック体制の解消に先立っても、ワルシャワ条約を民主化すべきであ

る。全加盟国の平等な政治的地位が保障されるべきである。特別追加条項において、ワルシャワ条約加盟国の個々の社会的、人種的少数派の人権が承認され、各加盟国でそれが遵守されているかどうかを監視するための機構を設置すべきである。

—地域レベルでの市民社会の諸権利も保障されなければならない。これには、ワルシャワ条約加盟諸国間の国境を越えた旅行、雇用、移住の自由、思想および文化的作品の自由な往来、個人および団体相互間の自由な連絡、の権利が含まれる。

われわれはときとしてこの種の約束を耳にすることがあるが、1968年の傷が癒えるまでそうしたものは信用できない。

—侵攻した国々の指導者が20年前の侵攻を公然と非難すべきである。プラハの春に対する中傷をやめ、政治的、文化的、科学的生活から追放された多くの人々を復権すべきである。

—ソ連は、ソ連・ポーランド関係の隠されている事実だけでなく、1953年のベルリン労働者に対する弾圧、1956年のハンガリー蜂起、1981年のポーランドのクーデターにおいて果たした自らの役割をも明らかにすべきである。

以上すべては上からもたらされることはないだろう。われわれは、われわれの名において政府が命ずる恥ずべき作戦をわれわれ諸国民が決して同意しないということによってここで明白に述べることによって、この過程を開始すべきである。これまでわれわれ自身が犠牲者だった。中・東欧のわれわれは、自由で民主的で平等な国民としてのみ勝利者になることができる。

署名者：チェコスロヴァキア＝10名、ソ連＝5名、ハンガリー＝12団体、ポーランド＝31名、東ドイツ＝5名

〔訳：湯川・順夫〕



# ポーランドのための危機克服協定とは？

## ブロニスワフ・ゲレメクとのインタビュー

An Anti-Crisis Pact for Poland? : An Interview with Professor Geremek, June 1988  
Uncensored Poland News Bulletin No.16 and 17 /88, 10 Sept. 1988

【編集部注】ブロニスワフ・ゲレメク教授は「連帯」の主要顧問のひとり。今年の4月～5月のスト以前、彼は『コンフロタツィエ』誌（地下出版ではなく、公式に発行されているもの）のインタビューで「危機克服協定」を提言し、一定の条件が満たされれば「連帯」は喜んでこれに賛成しよう、と語った。その条件として最も重要なのは、労働組合複数主義と社会の多元主義を認めることであった。これに続き、「危機克服協定」という概念について反体制派内での議論が高まったが、「危機克服協定」の語は当局の発言でも（当局の解釈による用法で）しばしば用いられるようになった。8月のストとワレサ＝キシチャク会談を経て、「連帯」も参加する円卓会議の展望が開けてきた今日、ゲレメクの「危機克服協定」は新たな重要性をもつに至っている。以下は、1988年6月15日付の地下紙『週刊マゾフシェ』第225号に掲載されたゲレメクのインタビューである。なお、本誌10月号にも同時期のゲレメクのインタビュー「ポーランドの危機克服のために」が掲載されているので参照されたい。

できうることは何でもすべきだ

——数月前にあなたが『コンフロタツィエ』誌のインタビューで危機克服協定について語った時、あなたの考えは懐柔的だとか非現実的だなどと批判された。今となってみればそのうえにあまりタイムリーではなかったようだが。

まず全体的状況について話そう。人々の生活状況はどんどん悪化している。物質面でも、エコロジーの点でも、その他すべての面で。しかも悪化の速度は早まるばかりだ。何の希望も、展望もない。だから、私の意見では、選択肢は次のようなものである。すなわち、現在の政治体制をひっくり返すか、それともこの体制の枠内で変革の現実へむけて努力するか。政治体制の転覆は——もしそんな可能性があるならの話だが——政治思想の一部だ。だが私はその可能性はないと思う。また、変革へむけての満足すべき方法も見あたらない。だからこそ、私は、できうることは何でもやるべきだと言ったのだ——ただし、和解の実現を基盤として。

危機克服協定自体は私の発案ではない。その考え方は「連帯」のプログラムが経験を重ねてゆく中で育まれたものだ。オリヴァ体育館で開かれた「連帯」第1回全国大会（1981年）の思想をつきつめてゆくとそこへたどりつくのだ。この考え方が実際に登場したのは1987年、ひとつの転機を迎えて、〔当局と「連帯」の〕双方が次に何をなすべきか考えていたときだ。重要なのは、当局が新たな政策に転じる時はいつでも、彼らはそうした協定を結べる可能性を持っていると自覚すべきだという点だ。この見方は今の時期に合っていると思う。しかし同時に、「危機克服協定」の語が急速に使い占められつつある。これまでもたびたび当局がある言葉を取り上げてはプロパガンダに多用し、その言葉の本来の意味を破壊してしまった。

——社会と当局の間のつながりはすでにみな失われてしまった。その上、現在の支配層の人々には協定や和解を実現する能力がない。ポーランド社会学会のコロネル・クフィアトコフスキえそう言っている。



この問題は支配層内の首のすげかえをしても意味がないという点はきちんとおきえておかねばならない。私が、支配層が変わるかどうかにについて考えたりしないのもそのためだ。私がまず考えるのは、政策に変化が起こる可能性があるかどうかだ。政策変化が基本的に必要なのだ。だが同時に当局者たちは自分たちの欲求が満たされなくなるのではとの考えに足かせをはめられている。さらに、社会における彼らのパートナーにはそれぞれの立場やそれぞれの見方があるということを彼らが理解し容認するかどうかは、越えがたい問題として残っている。

#### 自由選挙は幻想

——「連帯」が何をあてにしており、何をやろうとしているのかはあまり明快ではない。現在では「連帯」の合法化を求める要求だけではきわめて不十分となっている。「連帯」のプログラムに何らかの影響に及ぼしうる人々も、このあいまいさを払拭するために何もしていないように見うけられる。

「連帯」の復権は、私の考えでは、絶対に必要

な前提条件だ。プログラムではなくてね。「連帯」はこの点を自覚しているし、合意と協定の線で物考える人はすべてこれを理解しているはずだ。当局が合意を結ぶ相手は、社会の中の独立した諸団体なわけだが、「連帯」はそうした団体のひとつなのだ。「連帯」の認知は、合意へむけての政治的意志の問題だ。

われわれが「多元主義（ブルーリズム）」と言うとき、それはあらゆる扉を開放する意味に響くかもしれない。しかし実際は、それは望ましい経済・社会状況に応じたものである。ただ、今のところ政治システム、もしくは単一政党の役割に関して明確なプログラムがない。私としては、われわれが必須と考える民主化へむけたメカニズムについて、プログラムを組む時期が到来したと考えている。もっとも、そうしたメカニズムを実行するうえでどこを限界とするかはわれわれの仕事ではないがね。

——それについては最近、自主管理諸グループの会合で、民主主義的な議会選挙が必要だとの明快な見解を出したところがある。

その見解をとっている自主管理評議会は少数で状況を変えるだけの力を持っていない。自由選挙などは幻想だと私は思う。われわれが「公的生活に根本的変革が必要」というとき、それは企業レベルの所有形態（国営か私営か）の問題や経済、学問、教育、医療サービス等々におけるノメンクラトゥーラ・システムの廃絶だけを意味しているのではなく、権力にコントロールを加える機構の導入も含めて言っているのだ。1981年にわれわれは「国家経済に関する社会評議会」を提案した。われわれが望んだのは、経済プログラムを作成し、それに信頼性を与えることのできる、政府から独立した団体——その団体はプログラム実行上の権力を持たないが、情報源の利用と世論に訴える手段を持つ——だった。今になって、あれは現実的かつ重要な提案だったと思う。

ヤルタ以後の政治体制が存続する間は、自由選挙の可能性はない。もしも、完全な政治的自由か、それとも現在の形の現存社会主義かの二者択一しかないとしたら、政治的討論など意味はない。わ

れわれは権力に対する社会的コントロールをいかにして作るかを考えねばならないのだ。つまり、代議システムの外で社会が意見を述べられるような代表制度を。あのような地方議会選挙を経験した後で、どうして共産主義権力がわれわれに議会の自由選挙を与えてくれるなどと期待できようか。

### リアリズムにのっとった考えを

——あなたは「体制の民主化の限界を決めるのはわれわれの仕事ではない」と言われたが、実際のところは常にその限界がどこにあるのかを指摘しておられる。こうしたことは、あなたの提案が「連帯」運動の活動家に向けてではなく当局へ向けてのものだとの印象を与える。

公的生活の中で、これがなくて困っている、これが欲しい、というものはいくらでもある。しかし、「連帯」特有のリアリズムの伝統にのっとった考え方をしなければならぬ。すなわち、地政学的状況からくる体制側の必要と社会の願望とが交差するわが国のような場所で、どんな変化が可能かの領域を見定めねばならないのだ。私が危機克服協定について発言した時もこのことはしっかり頭の中に置いていた。私はリシャルト・レイフのひそみにならって「協定(バクト)」という語を使った。なぜならこの言葉の意味の中には、合意に至るといふ概念が含まれていないからだ。

### 「連帯」の硬直性を変えねばならない

——今言われたことについてうかがいたい、4月～5月のストライキの後でどのくらいの変化がみられたか？

ストの後、すべてが変化した。あれは試練の時だった。この国のあらゆる勢力の本当の状態が明らかにされた。そしてその時に自己に厳しい見方を取ったところだけが、次の試練に耐えることができるだろう。このストライキの否定的面は何かといえば、スト労働者と当局の双方に、現状のままにとどまろうとする傾向が見られたことだ。現状のまま、未来を志向しないということだ。当局側は、力による弾圧への自信を深めた。「連帯」



側はまたひとつ象徴的物語をふやした——ストを終えてレーニン造船所から出てきた労働者の行進は実に素晴らしい情景だったから、「連帯」伝説のコレクションの1頁を飾ることだろう。

双方が、この出来事を違ったふうに今後に生かしてゆく可能性はあるのだろうか？ 当局の側には、どうやら前向きな姿勢の徴候がいくらか見られるようだ。彼らは〔スト終結について〕大々的な勝利的宣言をしなかった。しかし、当局に、今回のストがより大規模な別のストの前兆であり、新たなストのあかつきにはすみやかに根幹的決定を下さねばならないということを理解できる力があるだろうか。ポーランドに益する道は私にはひとつしか思いつかない。それは、相互信頼への過程をスタートさせるだけの政治的変革が行われる道である。

「連帯」にとっての主要問題は、若い労働者、学生、知識人などの急進的志向の強い立場と、われわれの言う合意という言葉との間の相当のギャップをどうするかという点だ。両者の相違は劇的な形で噴出することもありうる。「連帯」はいずれは意志決定の中核となってゆく若い世代のグループ

とのつながりを失ってしまうかもしれないのだ。

——つまり、「『連帯』の春」が終末の序曲となるかもしれない、と？

過去7年の間に、「連帯」はその要求と欲求のレベルを非常に高くまで引き上げた——そして、何も達成されなかった。一方で、「連帯」とは別のもっと小規模で重要性もさほどない運動がいくつかあり、その規模と射程の小ささゆえに目標を達成した。しかし、対立が激化した時には一般的な提案や要求ではなしに、他でもない「『連帯』なくして自由なし」の叫びが突如として上がったのだ。「連帯」についてあまりよく知らず、地下で発行されたパンフレットを手にとったこともな

く、組合活動家の名前といえばレフ・ワレサしか知らないような人々が、自己の代弁者として「連帯」を——「連帯」のみを——挙げる。これまでずっと「連帯」の弱点であった側面——象徴的、伝説的な不動の地位にありつづけていたこと——が、利点に転じた。しかしわれわれは将来を見つめなければならない。「連帯」の硬直性と人々の新たな期待がぶつかりあっている。どんな結果が生じるか、見届けよう。現在は、1980～81年に「連帯」を形成した人々がすべてを担っており、戒厳令中に「連帯」に加わった人々にはそれほどの責任分担がなく、それ以外の人々は用無しの状況に置かれている。これを変えなければならない。

〔訳：高橋 初子〕

## 改革は本当に可能か——ゲレメク教授に反論する

### 『週刊マゾフシェ』匿名読者の手紙

What Geresmek Does Not Say : A Letter to Tygodnik Mazowsze, July 1988  
Uncensored Poland News Bulletin No.16-17 /88, 10 Sep. 1988

【編集部注】上に訳出したゲレメクのインタビューに対し、『週刊マゾフシェ』の一読者が同誌編集部に送った反論の手紙が同誌第258号（1988年7月20日付）に掲載された。

これまで、ゲレメク教授の見解は多くの場合反対派全体の——「連帯」の、あるいは時に社会全体の——見解と同じであるとの評判が確立されている。だからこそ私は『週刊マゾフシェ』誌上のインタビューに反論したい。私をその気にさせたのは、特に、彼が「われわれは……」という言い方をし、彼の述べている見解が彼個人だけのものではないというニュアンスを与えている点である。

#### 「連帯」指導部の性格

彼はまた、「連帯」がいずれは意思決定の中核となってゆくであろうグループとのつながりを失

うかもしれないと述べている。これは、「党は大衆を把握する力を失いつつある」というスローガンを思い出させるが、私の連想などはどうでもよろしい、問題はその発言の真の含意である。この発言の意味するところは、その「グループ」が「連帯」の一部ではなく、「連帯」とはゲレメク氏が「われわれ」と呼ぶものである、ということである。別の箇所では、「現在は、1980～81年に『連帯』を形成した人々がすべてを担っている」と言っているが、これは全く正しくない。私は別の見方をしたい。つまり、おそらく、彼らがすべてを担っているのではなく、彼らが本当の代表者であるとみなされており、彼らの意見は広く伝えられ、多くの政治家が彼らと会談する、ということなのだ。ゲレメク教授は、「これを変えねばならない」と発言しているが、残念なことにとどうやって変えるかには触れられていない。もしや彼は「連帯」内部の「上からのペレストロイカ」のようなもの

を考えているのだろうか？ すなわち何人かの新人を指導部の戦に加えるといった。

インタビューではかなりの時間をかけて、体制を転覆するか変革するかの二者択一が語られている。彼は、体制転覆の可能性はないから第2の選択肢の変革の道を選ぶと主張するが、これはある意味で矛盾している。なぜなら、同時に彼は体制変革をめざした長年の努力によっても、事態は今のところ悪化するばかりだとも言っているからである。状況を悪化させるだけの結果しか生まないのなら、どうして第2の選択肢が第1の選択肢より現実的だと考えられようか。

ゲレメク教授は当局側の感情に大きな注意を払っている。彼は、当局が新しい政策を考えている時はいつでも合意、つまり「危機克服」協定の可能性があることを自覚しており、この点が重要だという。私の意見では、当局がつねに自分たちは正当性を持たない政権であり、外国の利害の代表者にすぎず、遅かれ早かれ以前のポーランド占領者たちと同様の運命に至ることになると自覚している方が、ものごとは良く進むだろうに、と思う。そうならば彼らは自己を救うため、真剣に歩み寄りの準備をするだろう。彼ら自身の立場が何らおびやかされなければ、そして彼らを最終的破壊から救うための「協定」を結んでくれるグループがいなければ、どうして彼らが譲歩しようなど

とするだろう。

### 自由選挙は幻想か？

ゲレメク教授は、自由選挙という考えは幻想だと述べている。自由選挙を訴えているのは少数のグループだとも言う。彼は、自由選挙について長年討論を重ねてきた地下出版を読んでいないのではないか。(……)それに、なぜ幻想と言わねばならないのか。自由選挙は憲法に何ら反しない。自由選挙はヤルタ協定で保証され、普通の国家すべてにおいてあたりまえのことと受け止められている(そしてわれわれはポーランドが普通の国家だと思う)。自由選挙を幻想だと言うかわりに、選挙法の改正を実現するため、国際世論を味方につけて国内外から圧力をかけるため、努力する方が良い。(……)

当局は自分からは何ひとつわれわれに与えはしない。われわれはできる限り、自分でかちとってゆくだろう。彼らがわれわれにどこまで許してくれるかを慎重に考察しているだけでは、何も得られない。むしろ、望むことを達成するためにはどうしたらよいかを考察すべきであり、われわれをどうやって止めるかの心配は彼らに任せておけばよい。

(訳：高橋 初子)



一九八八年八月三十一日、グダńスク協定八周年記念日の造船所ゲート前

# 改革か 革命か 停滞か

—ポーランド社会学会での討論から

Reform, Revolt, Stagnation?—A Discussion at the Polish Sociological Association  
Uncensored Poland News Bulletin, No.16—17/88, 10 Sep. 1988

【編集部注】以下は官許紙『ティゴドニク・クルトラルヌイ』1988年8月14日号に掲載されたポーランド社会学会主催のシンポジウム「改革か 革命か 停滞か」の討議内容の抜粋である。シンポジウムは8月スタートが始まる前に行われた。〔訳：水谷 駿〕

## 3つのシナリオ

リチャード・ブガイ まず何よりも政治の領域において古典的な構造と秩序の解体が生じている。たとえば、共産党に生じている事態は重要な意味を有する。1970年代に、レーニン主義タイプの伝統的な党が国家システムを構成する1要素に変化していく過程が始まった。党員の徴募と世代交替の自然な過程も破壊された。現在の党は、経営者と退職者の組織だ。この両グループがおそらく党員の3分の2以上を占めている。もうひとつの新しい現象は、世界観を形成し、世界情勢を解説し、将来の戦略を作り上げる知識人と知識人の運動が存在しないことだ。さまざまな形態の反対派活動が徐々に制度化されつつあることも、政治の分野における新しい重要な変化である。これは明らかに「計画された」ものではなく、伝統的システムの諸要素の「退場」とその新しい要素による代替が無秩序に進んだ結果である。

改革の道と革命の道のいずれを展望するのが望ましいだろうか？ 改革の道の受け入れは、このような変化が経済状態の改善の、社会的自由の拡大の、その他の希望をもたらしうるか否かにかかっている。他方、革命の道は徹底した十分な変化を約束し、いかなる妥協も前提としない。しかし、それは危険である。革命のあと、ポーランドに新しい社会的、経済的秩序をいかにして樹立するかを、果たしてわれわれは本当に知っているだろう

か、という疑問もある。それがともなう社会的コストを多少とも楽観的に評価できるのでないかぎり、革命の道を選ぶことは難しいだろう。一般的には革命の勝利は可能である。今のところ、革命の道を求める冷静な議論は少ないが、今のような改革の挫折状態が続くならば、その支持者は増えていこう。

私の考えでは、体制的停滞のシナリオは最も可能性が小さい。ひとつには、伝統的解決策の正当性が完全に失われるからであり、もうひとつは現在の経済情勢のゆえにである。今日、実質賃金は1980年より20%も低下している。変化を求める巨大な圧力と巨大な社会的運動が生じている理由はまさにここにある。停滞がそのまま続くことはありえない。

それでは、改革の道が唯一の選択肢か？ 改革は社会的なコンセンサスを、十分な数の勢力の連合を前提とする。これこそが権力の機能を抑制し、人々に必要なことを受け入れさせるからだ。ところが、今日、このようなコンセンサスははるかかたにある。やはり革命しかないのか？ ますます多くの要素がこの道をサポートしているように見える。しかしこの先数年は、これまでと同じ傾向が続く可能性が最も大きいだろう。

## 潜在的圧力の高まり

ブロニスワフ・ゲレメク 現在の情勢を特徴づけるのは、潜在的圧力——私はこれを蜂起の潜在的圧力と呼びたい——の高まりだ。ポーランド国民の圧倒的多数が、現在の社会的、経済的、政治的、物質的条件を受け入れていない。彼らは不満を抱き、何かに向けて決意を固め、準備を進めている。

政府当局は、最近の4/5月危機のあと、抑圧

と世論操作を強めている。他方「連帯」は社会的象徴としての力を強めた。この面では以前から強かったのだが。

現時点で特に重要なのは国家の問題である。その役割を最少限にまで縮小するという問題である、と私は言いたい。

現在、われわれはどのような傾向を目にしているだろうか？ とりわけ重要なのは、ポーランド社会内部における対決気運の高まりである。一方ではエゴイスト的気風が広まっている。これは、人々の物質的条件が不断に悪化している条件の下では当然のことである。他方では、若者と大人の間の、勤労者と退職者との間の、労働者と技術者の間の、また労働者と知識人との間の対立が深まっている。「連帯」には、こうした対決気運を緩和し、共同体的空気を作り出す大きな力があるが、そのプログラムの説得力は限られている。その結果、当然のことながら、急進化の傾向が進み、個人や集団の政治的な行動的態度が目立っている。

現在問題なのが、停滞なのかあるいは解体なのかは私にはわからない。私の印象では、何よりも衰弱である。社会も政府も、相互の無力感のうち

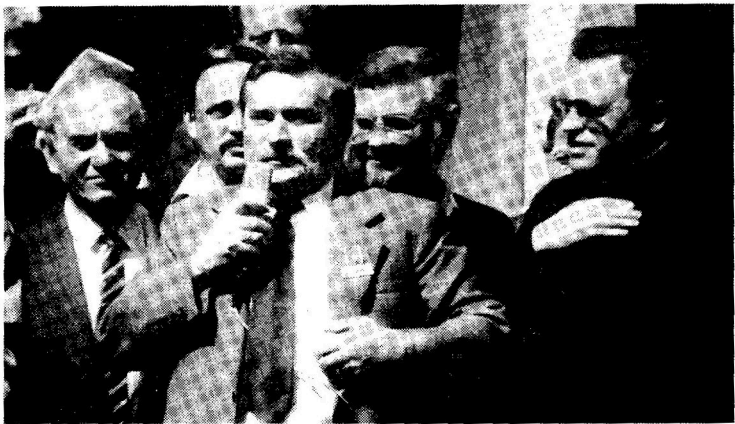
に衰弱を続けている。解体しつつあるのが共産主義体制だけなのかどうかは知らないが、ポーランドが解体しつつあることは確かだ。この解体の過程は、政府当局に対してだけでなく、国全体にその影響を及ぼしている。

われわれには何が必要なのか？ 危機克服協定ではない。1980年代に社会的合意の協定と呼ばれていた契約的協定の可能性を作り出す条件である。これは今でも可能だと信じる。

これまで政府がとってきたアプローチは、他のあらゆる任務の遂行よりも政治を優先させる、というものだった。政治目標優先のこのやり方に対して社会は、集团的、個人的行動の独自の政治化によって対応している。

### 抗議行動の不毛

ヤヌシュ・レイコフスキ 近い将来社会的爆発が生じる可能性はそれほど大きいただろうか？ 私の考えでは、ポーランドでは爆発の潜在力はまだまだかなり小さい。いかなる行動をとるにせよ、その行動によって追求される目的の価値に対する確信と、



1988年9月1日、グダンスク造船所のスト終りにあたって。左から造船所ストライキ委員会委員長A・シャブレフスキ、ワレサ、ひとりおいてヤンコフスキ神父。



J. スタニシウス

その実現のための効果的な手段が存在するという自信が必要である。問題が目標であれば、誰もがわれわれの社会的、経済的生活の改善をもたらすであろう変化を期待している、というべきである。しかし問題が手段であれば、抗議行動は不毛であるという結論に多くの人が到達している。大衆的ストライキやデモンストレーションがいかなる改善ももたらさなかったばかりか、まさに逆に状況の大幅な悪化を結果しただけだということを、圧倒的多数の人々が痛苦に満ちた経験から学んだからである。こうした経験のポーランド国民の行動に対する影響は、この数年、きわめて明白になっている。

「革命」が生じるためには、抗議行動の不毛性を「確信」していない巨大な数の国民が表舞台に登場することが必要である。このようなことはポーランドではまだ生じていない。この数年間は生じないであろう。

また、大衆的な運動が発生するためには、人々が信頼を寄せ、その存在が「成功のための心理的希望」を呼びさますような指導者が存在しなければならない。現在のポーランドにはこのような指導者はいないと思う。「連帯」のかつての指導者たちは大衆運動を指導する力を失っている。敗北の恥辱が彼らにのしかかっているためだ。「連帯」は、その組織としての力の弱さにもかかわらず、

ある別の力を持っている。すなわち、現に生じつつあり、国際的にも影響を及ぼしつつある新しい政治的傾向にブレーキをかける力である。それは体制内の保守派の台頭にも影響を及ぼしている。ここで私は、意外と思われるかもしれないひとつの見解を定式化しておきたい。反対派には現在、力関係を有利にかえるチャンスはほとんどない、と。逆に、それを保守派に有利にかえるはるかに大きな可能性を手に入れているのだ。

ポーランドの保守派には何らかの可能性はあるか？ 私の考えではイエスである。人民主義的、民族主義的スローガンを掲げれば、ポーランドでは多くのことをなしうる。

### 根本的变化

**ヤドヴィガ・スタニシウス** 私の考えでは、改革は経済と政府の両分野でその重要な特徴のすべてを取り除くようなものでなければならない。たとえば、集団所有制が維持されるかぎり、われわれはますます高まるアナキーに耐えてゆかねばならない。国家部門の根本的な変化、諸利害の制度的統合を含む政治的な変化が問題である。真の労働組合、新しい国会選挙法、政府の後退の可能性を阻止するような、こうした変化の法的な保障、などが必要である。

**ブガイ** 革命の前提が本当にその目的の明確な社会的認識とその方法の自覚にある、という議論は疑問だ。ポーランドでこれまでに生じた事態はこうした主張を証明しているだろうか？ 最近の抗議行動は、昼休み中の1人の労働者の行動から始まったといわれる。彼が、機械に近付いて行ってそのスイッチを切り、こう言ったというのだ。「おい、みんな、仕事なんてクソくらえだ」。何事もこのようにして始まるのだと思う。革命は、体系的な思考の結果でもなければ、普遍的な自覚の結果でもない。全般的な気分だけで十分だ。

### 改革の保証＝「連帯」

**ゲレメク** レイコフスキ教授は、ポーランドでは





今後数年のうちに爆発の潜在力がかなり高まると主張する。その可能性はある。しかし今日、かつて窓越しに「連帯」を眺めていた、つまりあの事態に能動的には加わらなかった世代が、すでに表舞台に登場している。この世代は、われわれの世代が彼らに与えた、彼らには何の責任もない、自らが選んだわけではない世界に生きているという事実を知っている。この世代は、その物質的状況を左右する何の力も持たない。現状では自分の家が絶対に持てないことを知っている。絶望状態とはこのことだと思ふ。その現れが海外移住だ。他にも抗議の道がある。社会的運動、あらゆる種類の反抗は、まさにここから生じる。いずれの側にせよ、この状況を評価ないし認識できないとすれば、将来その代償を支払わなければならない。しかもその代償はきわめて高価なものとなろう。

支配陣営における主たる問題は、多少とも以前のものに似た社会協定の再度の締結を可能とするために何をなすうかである。現在の状態をこのまま続けるわけにはいかないからだ。だからこそレイコフスキ教授が定式化したような考え方——これには私は反対である——が出てくる。すなわち、「連帯」こそが保守主義の支配を強化している勢力である、われわれを危険な国際関係に巻き込んでいる、政府当局のあらゆる政治的目的を阻害している、等等。これは、1種の脅迫とでも

言うべき議論であり、私はこうした議論をここで認めるべきではないと考える。改革プログラムを最初に提起したのは、まさにこの「連帯」であり、それは改革政策の社会的バックボーンとなりえたのだ。

1981年12月13日にあるひとつの決定が下された。戒厳令の傘の下に党は自ら独自の改革案を作り出し、経済改革の実施と社会的要求の実現を約束した。それでどうなったか？ 何が実現されたか？ 改革の分野では、何ひとつ実行されなかった。私は当局に悪意があった、あるいは事態の悪化を望んでいた、などと言うつもりはない。私が言いたいのは、保守派の抵抗の問題は政府機構内に集中しており、その克服のために政府機構の外での行動が必要だということだ。他に出口はない。したがって、党指導部内の進歩派勢力のカゼに社会が憂慮するなど期待してはならない。それはわれわれのあずかり知らないゲームなのだ。社会の知らないところで進行するゲームである。

### 新しい世代の登場

スタニシキス 誰が勝って誰が負けたのかという議論を続けることは見難に等しいと思う。つまるところ、われわれはすべてが敗けたのであり、これは政府当局も例外ではない。1988年5月のある調査結果によれば、社会の5%が政府を信用しているにすぎない。1982年から86年までの間にインフレ率が200%に達したこと以外、経済改革の第1段階が何だったのかを覚えていた人は今日では誰一人いない。改革を計画通り実行しなかったために、戒厳令さえも無駄に終わってしまったのだ。

最近の4/5月危機は、ある新しい力関係が政治の表舞台に登場してきたものと見るべきである。ある新しい世代が登場したのだ。それを正確に特徴づけるのはまだ困難だが、その現実主義とアプローチの多様性は明らかである。彼らは、知識人や教会の影響をあまり受けていない。ただしまだ独自の指導者を形成していない。彼らはグダンスク協定型の社会協定は信用しない。「連帯」の伝統的な修辭学や独特の政治的行動スタイルはこの世代には時代錯誤的に見える。

## 「連帯」「ワレサ」「レーニン造船所」——はじめてのポーランド

満島 裕直

8月31日グダンスク協定の日、「連帯」は「ワレサ委員長との話し合いに応ずる」という政府の回答を受け、全土のストライキを中止した。そして、ワレサと政府との話し合いが続く9月のポーランドへ私は何の準備もなく、ふらりと1人旅をしてきたのである。私は、ポーランドに知人がいる訳でもなく、「連帯」「ワレサ」「レーニン造船所」しか知らない人間である。しかも、ポーランド語は全く話せず、英語も片言というお粗末な人間である。でも、何の気後れも心配もなく、「ワレサに会うのだ」「連帯に会うのだ」「レーニン造船所を見に来るのだ」という単純な思いだけで、ポーランドへ旅立ったのであった。

### あこがれのグダンスク

9月18日、日曜日の朝、ワルシャワのオケンチェ空港から、レーニン造船所のあるグダンスクに向けて飛び立った。ポーランドの国内航空は、双発のプロペラ機で、30人乗りくらいの小型飛行機である。飛行機に乗る前には、厳重な手荷物検査が一畳くらいの狭い個室で行われた。私は「ポーランド月報」や「連帯」のマーク入りの腕章を持っていたので、見つかりはしないと内心ヒヤヒヤしていた。言葉がわからず、素直に荷物を見せたいせいか、無事に検査をパスしてほっとした。

飛行機に乗ってびっくりしたのは、入ってすぐの所にグリーンベレー風で完全武装の怖い目つきをした軍人が、乗客1人1人を監視しているのである。乗客が全員乗り終わると、今度は一番前に来て、再度全体をみまわすのである。ハイジャック防止にははずいぶん念の入ったことをするなと感心した次第である。それに比べ、スチュワートゥスさんは大変美しく、意外にもキャンデーや新聞のサービスもあり、快適な空の旅であった。ワルシャワからグダンスクまで約1時間の飛行であった。出発の時、ワルシャワは雨模様であったが、

グダンスクは晴れだった。空港に降り立った時、ついにあこがれのグダンスクに着いたのだという思いがこみ上げて来た。

空港からバスに乗り、グダンスク中央駅に向かった。どのバスに乗り、どこで降りたら良いのかということを知るために、白水社の「標準ポーランド会話」が役立った。また、高校生はわずかに英語が話せるので、道案内してもらえる。とにかく、ポーランドの人は、私が日本人のせいか大変親切で、言葉がわからないなりに時間をかけ工夫をして応えてくれる。

30分ほどで国鉄のグダンスク中央駅に着いた。天気あまりにも良いので、レンガ造の中央駅の古い建物と街ゆく人々の姿をビデオで撮影した。そして、市内地図を買った。キオスクで売っているのだが、売切れの店が多く、手に入れるのに苦勞した。

地図を手に、ブリギッダ教会に行くことにした。中央駅前から地下道を通って大通りを渡り、花売りのおばさんに道を尋ねた。おばさんはポーランド語で道を教えてくれたのだが、私にはちんぷんかんぷんで何もわからなかった。その時、ちょうどブリギッダ教会へ行く人が通りかかり、花売りのおばさんが声をかけてくれた。通りかかった2人は、30歳くらいの青年で、わずかに英語もわかるので助かった。その青年が「ポーランドへ何しに来たのだ」と聞くから「観光だ」と答えると「ワレサに会いに来たのか」と言うのである。

### 聖ブリギッダ教会のミサ

ブリギッダ教会に着くとミサの最中であつた。教会内に入れない多くの人々が外の広場にあふれていた。私は、その青年に「ワレサに会いたいのだが、会えないか」と尋ねた。すると青年は、「ついて来い」と行って私を教会の裏にある建物の中のワレサのオフィスに案内してくれたが、残念な

が誰もいなかった。教会の神父さんに聞いたら「今日のミサにはワレサは来ていない。ワルシャワに行っている」とのことだった。ワレサ委員長は政府との交渉で今一番いそがしい時期だから会えるはずはないと思ってはいたものの残念であった。青年は「ヤンコフスキ神父ならいるよ」と言ってくれた。

私は教会にもどり、クリスチャンでもないのに生まれて初めてミサに参列した。神父さんの話は、最初のころ何が何だか良くわからなかったが、終わりの歌がはじまったのである。「連帯」の歌である。参列者が皆立ち上がり、右手でVサインをしているのではないかと。私は、写真でしか見たことのないこの光景を目の当りにし、自分も一緒になってVサインをし、歌っている現実感動してしまった。本来なら、ワレサの演説があるのだろうが……。その青年は「また来週の日曜日にトライしてみたら」と言ってくれた。その時、群集の中を1台のワゴン車が入ってきた。そのワゴン車は外から中が見えない構造になっており、女性が運転していた。教会の裏庭に入り、数分後に再び出てきた。ワゴン車は、群集をおしわけどこかへ出て行った。人々はVサインのまま歌を歌い続けていた。私は青年に「あのワゴン車にはヤンコフスキ神父が乗っているのか」と聞いた。青年は、「たぶんそうだ」と答えた。

また、ブリギッダ教会に着いた時、教会の入口付近に大型のトレーラーが1台停まっているのが気になっていた。この大型トレーラーは、ミサが終わった後わかったのであるが、ヤンコフスキ神父の乗ると思われる車が出て人々が解散すると同時に、教会の裏庭に通ずる道に移動し、外部と完全に遮断するために使われていた。

教会の周辺で警察やソモ（機動隊）の姿を見ることはなかったが、人々の連係のとれた動きは、意識的に「連帯」をカモフラージュしているようであった。

### 破格の値段の民宿

この日はホテルの予約をしていなかったため、まず宿を探すことにした。日曜日でインフォメー



ワレサ委員長と筆者

ションは休みのため、自分の足で探しまわることにした。中央駅前のホテルの入口付近でおじさんに呼び止められた。民宿の斡旋をしているのである。1泊1万2,000ズウォティ(公定レートで約3,500円、ヤミレートで約1,200円)だと言うのである。「もう少し安くならないか」と交渉していると、別の民宿斡旋のおばさんが現われて、「うちは1泊5,000ズウォティ(1,400円/500円)だよ。あのおじさんの家は100%先だよ」と言うのである。おじさんも負けじと「お前の家の方が100%先で安いではないか」と言い合いの喧嘩がはじまってしまった。

私は、原因を作っておきながら早くそこを立ち去りたくなり、「おじさんの所の民宿に決めたから行きましょう」と言ってしまった。おじさんの所の民宿に決めた理由は、金額が安いだけでなく、ポーランド語以外にドイツ語が話せたからでもあった。おじさんには申し訳ないことをしたが、今日泊る宿を見つけることができ、とにかくほっとした。

おばさんの家は、バスで15分ほどの所にある5階建ての「公団住宅」風の建物であった。室はきれいで、白黒テレビも完備されていた。家には20歳くらいの息子さんがおり、英語を話すので、ワレサの家の位置を聞いてみた。すると、親切に教えてくれた。「昨年までザスバに住んでいたが、今年に入って家を買ってポランキへ引越しした」と言って地図に位置を入れてくれた。ワレサの家はこの民宿から近く、ジョギングで行ける距離であっ

た。息子さんに「今からワレサの家に行って、ワレサに会いたいのだが……」と尋ねると、「プロブレム（問題だ）！ 今、ワレサの家の周りにはポリスとゾモがいる。行かない方が良い」と言うのである。私は、機動隊がいると言われるとよけい行きたくない性分なのだが、ここでは、青年の忠告に従うことにした。

居心地の良い民宿で、おぼさんの手料理もおいしいので、私は2泊することにした。2泊食事付で1万ズウォティ（2,800円/1,000円）である。なんて安いのだろう。その後、おぼさんが「ドルとチェンジしないか」と言ってきた。ポーランドでは、街頭でもタクシーに乗っても必ず「チェンジマネー？」と言って来る。外貨でないと西側の良い品物が買えない国なのである。ズウォティでは、品数が少なく、品質もあまり良くないのである。しかも長い行列をつくってである。子供の誕生日にはちょっと気のきいたプレゼントをしたいと思うのが親心であり、どうしてもドルが必要になってくるようである。両替のレートは、国営のオルピスで1円=3.38ズウォティである（公式レート）が、闇レートだと1円=10ズウォティ以上になる。民宿のおぼさんは、30ドルを4万ズウォティでどうだと言っていた。両替は闇に限る。

### レーニン造船所の労働者たち

翌日、レーニン造船所をはじめ市内観光に出かけた。前日のワレサの件が気になっていたので、まずブリギッダ教会へ行ってみた。すると、教会の裏庭に数10人の男たちが集まっていた。胸に“SOLIDARNOSC”のバッジをつけていたので、「レーニン造船所の『連帯』の人ですか」と尋ねてみた。すると、日本人が珍しいのか、皆寄って来て、わからぬ言葉で話し合いがはじまった。

「レーニン造船所の1日の労働時間は8時間。収入は1カ月6万ズウォティ」「1カ月の生活費はだいたい4万ズウォティ」「ポーランド全体の平均賃金は3万ズウォティ」「最低賃金は2万ズウォティ」ということであった。日本から持って行った『ポーランド月報』を見せると、関心を示し、写真やカットを見ながら話がはずんだ。「連

帯」の人も私をただの観光旅行者ではなく、「連帯」を支持する日本の労働者として受け入れてくれた。その中の何人かが私の胸に「連帯」のバッジを付けてくれた。私も、お札にたくさん持ってきた日本のタバコ（ピース）をプレゼントしたら、大変喜んでくれた。ポーランドのタバコは、確かにまずいので、日本のタバコは喜ばれて当然とも思った。

その時、ブリギッダ教会で働いていると思われる女性が外に出てきたので、私はしつこくもワレサのスケジュールを聞いてみた。するとその女性は、「今日の午後1時からここでワレサとヤコフスキ神父が昼食をとることにしている」と言うのである。「本当ですか」と聞き直すと、「ワレサは13時にここに来ます」と言うのである。非常にラッキーだと思った。そしてワレサ委員長が来るのを待ちながら、ブリギッダ教会で「連帯」の人たちと記念写真を撮ったり、音楽や映画の話などをしていった。やはり、人気のある歌手は「マイケル・ジャクソンやマドンナ」であり「ロックやポップスが好きだ」と言う人が多かった。そして、私から「一杯やりましょう」Napijmy osie jednego! ともちかけたら、「行こう、行こう」と言う話になり、18時に教会に集まってから、ウヅカを飲みに行くことになった。

### ワレサ委員長に会う

その時、ワレサ委員長が自分で紺色のワゴン車を運転して教会の裏庭に入って来た。私は、すぐさまワレサ委員長のそばに近付き自己紹介をして、握手を求めた。ワレサは、政府との交渉のためか厳しい表情であった。そして、14時から時間を取って会うことを約束してくれた。

後でわかったことであるが、14時からワレサ委員長との記者会見が教会裏のオフィスで予定されていた。そして、フランスとドイツのジャーナリストが集まっていたので、私もいっしょに混じって、「日本を代表するジャーナリスト」みたいな顔をして記者会見に同席してしまった。記者会見の内容は、8月のストライキのこと、ベレストロイカのことなどが質問され、約1時間行われた。

私は持っていたビデオカメラでその内容をすべて記録した(従って、ポーランド資料センターでその詳細を知ることができるので、ここでは省略する)。

記者会見が終わった直後、私はワレサ委員長に私の職場(環境アセスメントセンター)の労働組合(EAC労組)の腕章をプレゼントし、「前々から1度お目にかかりたいと思っていました。お目にかかれて光栄です」と伝えた。EAC労組の腕章には、「SOLIDARNOSC」というマークが染め抜かれており、ワレサ委員長は、感動してくれたのかわからないが、いきなり私の肩を抱きしめ、記者たちに向かって写真を撮るように指示した。私は、どういう顔をしていたのかわからないくらい興奮していた。ワレサは次の予定があるようで、急いで車に乗り出発して行った。

私は、あまりの感動にブリギッダ教会のベンチに1人、座っていた。すると、「連帯」の10人くらいの集団が私のところに近づいて来た。そのグループのリーダーらしき人が、私に握手を求め、自分の胸につけていた「連帯」のバッジをはずして私の胸につけてくれた。彼は「これはグダンスクの『連帯』バッジだ」と強調していた。私は「ジェンクウイェン(ありがとう)」と言いながら皆と固い握手をかわした。今日はじめて会った人たちの心、心の通う思いであった。

### 嫌われた「インターナショナル」

18時から別のグループの「連帯」の人と約束通りウォツカを飲みに行き出た。レストランで食事をしながら、ウォツカを飲んだ。最初は、「ド・ドナ(乾杯)」「ザ・ナシオン・プシヤジニ(われわれの友情のために)と威勢が良かったのだが、ウォツカも3倍目になると飲むのが大変になった。酔っ払いながら、『ポーランド月報』を出して「連帯」の地下組織のことやベレストロイカについて聞いてみた。ベレストロイカについては、「カモフラージュだ」と断定的に皆が言っていたのが印象的だった。その後、私が「インターナショナル」を歌いはじめたら、皆が「ロスケ」と言うもので、すぐに「ワルシャワ労働歌」を歌いは



造船所の「連帯」労働者と仲良くなる

じめたら、声が大きくなり、へただったせいか、今度は店の人からいやがられてしまった。

そして、私が調子に乗って「ディスコに行こう」と言い出したら、「きれいな女の子がいるから行こう」ということになり、タクシーでディスコへ行った。私は1曲目を踊った所まで覚えているのだが、その後は、全く記憶がなくなった。気がついた時は、レーニン造船所の労働者のホテル(寮)のベッドの上に横たわっており、二日酔いで頭が割れそうに痛いのである。前夜は、深夜2時までディスコで踊ったり、飲んだりして、寮に運び込まれたそうである。私を部屋までかつぎ上げてくれた人や「連帯」のcock長まで集まってきた。前夜にあればウォツカを飲んだのに皆元気である。玉子焼やチーズ、パン、紅茶を朝食として出してくれた。私は「二日酔いで申し訳ないが食べられない」と言ったら、今度は小さなグラスにウォツカを注ぎ飲みというのだ。向い酒をやったことはあるが、「向いウォツカ」は初めてである。

とにかく、レーニン造船所の何人かの「連帯」の皆様には大変ご迷惑をかけてしまった。特に、民宿のおばさんは、一晩帰ってこなかった私を心配してくれた。朝帰りの私の顔を見てほっとした様子だった。「おばさん、大変ご迷惑をおかけしまして、ごめんなさい」。

## 「連帯」が期待するもの 政府当局が期待するもの

### 「連帯」在外調整局

What Are the Expectations of Wałęsa and Solidarność, What Are Those of the Authorities? Coordinating Office Abroad of NZSS "Solidarność"

Solidarnosc New, No. 119, 15-30 Sept. 1988

簡単に言えば、両陣営とも1980年秋以来同じ期待を抱き続けている。ヤルゼルスキ將軍と党官僚たちはその権力の独占を維持しようとし、一方ワレサ委員長と「連帯」は、党と政府に対してその全体主義的な統治スタイルを放棄させ、根本的な改革を導入させて、危機克服のチャンスを開きたいと考えている。

国家と社会の力関係はすでに8年前に歴史的に変化した。「連帯」の登場——1981年10月の第1回全国大会の綱領で自らを労働組合にして社会運動と定義した——は戦後ポーランド国民の最大の成功である、と外国の多くの政治家、歴史家、そしていわゆる普通の市民が指摘している。それ以来、独立自治労組「連帯」はあらゆる人々の関心を集めてきた。「連帯」は多くの同盟者と支持者を得ているが、反対者と敵もまた無数にいる。とりわけ、政権党の共産党は、「連帯」の登場によってポーランド労働者階級の真の代表であるとするその主張を根本から全面的に覆されたことを知っている。それは、ポーランドの支配を維持するために必要な最低限の国内的威信と国際的信用を得るために、「連帯」を全面的に否定することもできるし、その支持を求めることもできる。しかしながら、この後者のためには、政府は市場経済と議会制民主主義を承認して国を危機から救い出すための真に実効ある措置をとらなければならない。ところが、それまでの間、当局は「連帯」圧殺の努力を続けようというのだ。

最近、政府の「連帯」弾圧策がさらに拡大している。組織構造を破壊すれば、「連帯」はたちまちのうちに解体する、というこれまでの——8年前になされた——当局の計算が間違っていたことは今や明らかである。最近のストライキは、「連帯」が今なお存在するばかりでなく、そのた

めに闘う意志と能力を持つ若い活動家たちを引きつける組織でもあることを明確に実証した。そして今や当局は、「連帯」の存在を否定するという幼稚なやり方をあきらめて、現在の「連帯」は1980年、81年の「連帯」とはまったく違うという、手の込んだウソを正面に押し立てている。こうした解釈にたてば、最近党の当局者が度々ほめかす「連帯」の最終的再承認は、必ずしも1981年12月13日に否定されたその権利と自由のすべての全面的復活を意味するものではない。したがってそこには、彼らが言うところの「相互的譲歩」ないし「理性的妥協」のための必要な合意を口実として、組織的連続性を「連帯」から奪い去ろうとする、当局側のカムフラージュされた、それだけにいっそう危険な意図が隠されている。ヤルゼルスキ政権は、「連帯」、さらには独立自治労組「連帯」と名付けられたまがいものに合法性を付与することによって国民をあざむく、といった希望を持っているのかもしれない。

しかしながら、そのような組織は、「連帯」の財産の継承者ではありえないし、1980年8月協定の署名者でもありえない。それは、1981年秋の第1回全国大会諸決議の継承者でもなければ、1984年のILO委員会報告書が言及した組織でもなく、1986年にICFTUとWCLに加盟した団体でもなく、米国議会から毎年財政的援助を与えられる組織でもない。政府当局は、彼らのやり方——「円卓会議」での、あるいはその幻想に支えられての——が「連帯」指導部とその委員長に、組合組織の解体を本不意ながらも受け入れさせる、と期待しているのかもしれない。

「連帯」の破壊を狙った政府当局の最新の試みが、これまでのその政策と同様、失敗に終わらうことを疑う人はいない。確かに当局は、いか



円卓会議を提案したキシチャ内相

なる前提条件もなしに「連帯」を交渉の場に出る気にさせることに成功した。この条件のあいまいさを利用して、当局側はすでに、「連帯」の存在そのものとその組織構造が交渉の対象となると主張している。この主張は、組合の独立性に関するILO条約の規定に照らしても不条理である。ヤルゼルスキ政権は、「連帯」の自壊を期待している。しかし、組合メンバーの間では、老いも若きも、「連帯」なくして自由なし」は空虚なスローガンではない。むしろ、「連帯」の存在は何を

もってしても守られるべき価値だと考えられているのである。

### 「連帯」全国執行委員会コミュニケ

1988年9月25日、グダンスクにおいて「連帯」全国執行委員会が開催された。会場には、各地ストライキ委員会代表と個人農「連帯」代表が参加した。国の現状が討論され、スト労働者に対する弾圧が今も続いていることが確認された。「連帯」法と介入委員会は未払賃金の補償を約束する。各工場で「連帯」設立委員会が続々と結成されており、これは「連帯」の活性化を証明する。新たに設置された「連帯」広報局からこの間のストライキ中の活動状況が報告された。円卓会議にむけたプログラムと予定が検討された。ワレサ委員長提案に従い、全国執行委員会を拡大し、グダンスク、ヤシチェンピエ、シチェチンの各地方のスト委員会代表、ノヴァフタとスタロヴァヴォラの各工場スト委員会代表をメンバーに加えることになった。代表の人選は各組織が行う。また法と介入委員会のZ・ロマシェフスキ委員長も全国執行委員会に加わるようになった。

### 編集後記

☆今週中にも「円卓会議」が開かれる予定とのこと。政府側は「連帯」を分断してその「穏健派」をとり込もうとし、「連帯」側は経済改革について発言権を得ることによって活路を見出そうとする——そんなふうに見測されていますが、重要なのは、戒厳令にもかかわらず、党がついにそのヘゲモニーを再建できなかった、ということでしょう。

☆いずれにせよ、簡単には進まないでしょうが、対決の局面から対話の局面へと舞台が変わったことだけは確かだと思います。

☆隣のチェコスロヴァキアでは、「改革派」の首相が更迭され、後任に「穏健派」が就任と伝えられま

す。この場合「穏健派」とは改革に慎重であることだそうで、何か言葉の乱用のような気がしないでもありません。これは日本の新聞だけのことでしょ

☆20年前のソ連侵攻の後遺症がうずいている、ということかもしれません。憲章77その他の反対派組織の地道な活動が続いていますが、道なお遠し、の感です。

☆読者の満島裕直氏にはポーランド訪問記を寄せていただきました。ワレサ委員長と並んで撮った記念写真、お2人ともとても良い表情をしています。「ああ、いい写真だな」と洩らした事務局メンバーがいたことをお伝えしておきます。写真もいろいろ拝借しました。あわせてお礼申し上げます。

1988年10月17日 (み)

月刊「ポーランド」通巻八〇号  
 一九八八年十一月五日発行(毎月一回五日発行)  
 〇日第三種郵便物認可

☆☆ ポーランド月報既刊号目次 ☆☆

**1988年5月号(通巻74号) 20頁 400円**

自主管理と「連帯」……………3  
 ワルシャワ「連帯」の討論から  
 進めぬ実生活上の改革……………8  
 エルネスト・スカルスキ  
 スターリン主義者との対話を終えて……………12  
 インタビュー：テレサ・トランスカ  
 日本語版刊行準備が進む「ワレサ自伝：希望への道」  
 ——作業ノートから……………17  
 ポーランド日誌 1988年2月17日～3月22日……………18

**1988年6月号(通巻75号) 24ページ 400円**

「連帯」なくして自由なし  
 値上げ抗議・「連帯」復権のストライキ闘争の  
 記録……………3  
 ストライキ日誌 1988年4月25日～5月5日…9  
 新しい情勢 新しい戦略  
 新しい局面とわれわれの任務……………10  
 ワルシャワ地方執行委員会声明  
 新たな展望 インタビュー：Z・ブヤク/  
 J・リティンスキ……………12  
 「歴史の空白」は埋めるのか……………16  
 ——ポーランド＝ソ連関係史の隠された部分  
 歴史問題社会委員会  
 あるポーランド人「あめゆきさん」の話……………20  
 「ワレサ自伝：希望への道」……………21

——浮き彫りになるワレサ路線  
 ポーランド日誌 1988年3月22日～4月29日……………22

**1988年7月号(通巻76号) 20ページ 400円**

「連帯」全国執行委員会声明  
 ストライキは「連帯」の必要性を証明した……………3  
 見せかけの選挙には参加しない……………5  
 新しい情勢 新しい戦略  
 何かが起こる前に ヤツェク・クローン……………6  
 初心に立ち返って マチエイ・ザレフスキ……………9  
 「ワレサ自伝：希望の道」  
 「その時 その人が」 M・ヒンドリー……………11  
 ヴロツワフ  
 ヴロツワフの闘いの現状……………12  
 『週刊マゾフシェ』  
 「オレンジ・オルタナティブ」のその後……………16  
 ポーランド日誌 1988年4月30日～5月25日……………17

**1988年8/9月号(通巻77/78号) 32頁 500円**

「連帯」は存在する——I.L.O大会へのアピール…3  
 「連帯」在外調整局代表イェジ・ミレフスキ  
 新しい民主主義的妥協に向けて……………4  
 インタビュー：アダム・ミフニク  
 転換点を迎え活気づく「連帯」……………20  
 ポーランド訪問報告 前野良/佐久間邦夫  
 ポーランド日誌 1988年5月26日～6月23日……………30

<b>発行所・ポーランド資料センター</b> Center for Polish Research %Kazukuni Bldg. 3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101	〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F 電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069 定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)
---	--